

展開する場の中で

PTA会長としての1年間を支えた軌跡

富永 良史

序. 奇跡と軌跡

平成27年度、小学校のPTA会長を務めた。
児童数650人、保護者数1000人。
地区の人口11000人。
大きな地区の大きな小学校のPTA会長。

帰郷して15年が過ぎていた。

PTA会長としての1年間をふりかえる物語は
15年前に遡って語り始められる。

○

平成12年末 帰郷

14年 市民体育大会陸上監督

17年 地区体育協会事務局長

21年 幼稚園後援会長

25年 小学校PTA広報部長

26年 同副会長、主任児童委員

26年12月 次年度会長に内定

PTAの意味、方針の必要性を感じる

27年初春 方針、組織、構想

フワッとつながって、ギュッと話しあって

ドカン！と実行する。 マルの組織図

4月 総会、会長就任、方針を語り続ける

5月 奉仕作業、体育大会、和やか活気

6月 懇親球技大会 白熱歓喜、最高参加者

「市P連で勝つ」願いが浮かぶ

子供達のための夏祭り企画始動、挑戦

地域に協力呼びかけ、新たな展開

7月 夏祭り企画、緊迫、膨張

地区別PTA研修で事例発表

壁新聞講座新設、公民館との連携

手書きイラストの広報紙、独自色

8月 夏祭り1000人の盛況。歓喜の打ち上げ

9月 合宿通学、地域総がかりで

市長教育長と語る会、事例発表

地区文化祭への出展、壁新聞からヒント

協働製作盛り上がる

10月 地区文化祭への協力、出展

壁新聞、福井新聞社長賞など快挙

カルタ教室新設、公民館との連携

11月 市P球技大会、5年ぶり優勝

6月に抱いた願い実現

12月 2学期の様子を掲示物に協働製作盛り上がる

1月 市カルタ大会4位の快挙

2月 新事業「6年生におくる、みんなのことば」

短期集中でメッセージを集め始める

3月 「みんなのことば」700通達成、壮大な作品

卒業式「命を燃やせ、今ここで」

4月 入学式「ゆっくり、ゆっくり、大きくなれ」

総会「奇跡の1年」

5月 市P連広報「キセキの1年」

6月 教師教育研究「展開する場の中で」

○

1年前、私の脳裏には

漠たる想いだけがあった。

つながりの広がりこそが

子どもたちの成長を支えるはず。

だから、つながりを広げよう。

あたたかくて、やわらかいつながりの輪で

子どもたちを囲み、包み、応援しよう。

1年後、私の脳裏には

驚嘆の日々が刻まれていた。

ひとりの想いに過ぎなかったことが

伝わり、広がり、仲間の中で、触発し

次々と現実になり、新たな想いを生み

さらに展開していった。

この1年間、歩んできた道をふりかえった時私には、奇跡のようだと感じられた。しかし、しばらくして、思い直した。これは、奇跡ではなく、軌跡だったのだと。

切なる想いを開き出せば
仲間が集い、想いが広がり
場が生まれ、次々と展開していく。

その様は、まるで奇跡のように見えたが
場が豊かに展開していく軌跡だった。

1. 帰郷、陸上監督

結婚して、いくつかの事情が重なり、平成12年末に生まれ故郷に帰ってきた。高校卒業までを過ごした故郷に、県外出身の妻とともに帰ってきた。同級生とのつながりも希薄になっており、ましてや地域とのつながりは皆無に等しかった。どこに誰がいるのかわからない。誰がどんな立場にいるのかわからない。そんな状況の中で、変化は、向こうからやってきた。

大学時代に陸上部だったこともあり、地区の体育祭には早々に参加するようになった。帰郷2年目だったのだろうか。まだ30代前半だったし、陸上部時代の体力的・技術的な蓄えもわずかに残っていたこともあり、100mを1位でゴールする「地域デビュー」を果たした。そんなつもりはなかったが、新参者が注目を集め、地域社会に迎え入れられるには、ちょうど良いきっかけだったのかもしれない。

地区の体育祭を主催する体育協会（以下、体協）の目に止まり、市民体育大会の陸上競技へ地区代表としての参加が決まった。怪我をしてしまい、結果を出すことはできなかったが、体育協会の役員の人たちと関わる機会となった。協会の会長も、理事長も、祖父母や両親のことを知っていて、あそこの息子さんか、と優しく迎え入れてくれた。自分を育ててくれた家族が地域の中で築いていた目に見えない財産を感じた。

その後、走って鍛錬する習慣を取り戻し、地区体育祭での勝利が続き、市民体育大会でも勝利した。地域の陸上選手としての注目が増していった。私は、市民体育大会陸上の部の監督を務めるようになった。異例の若手監督だった。監督と言っても、指導するわけではない。仕事は、地区内からの選手集めとチームのムード作り。まだまだ地域社会になじみの薄い私が、10000人を抱える地区の中から20代から60代の多世代にわたって代表選手を集めなければならなくなった。走るのが速いことが知られているにすぎない私が、広

大な地域社会に積極的にアクセスしていく修行の始まりだった。

前任者が心配してくれて、選手候補のところに、1件1件同行して、新任監督の私を紹介し、出場を一緒にお願いしてくれた。右も左もわからない当時でも、その手助けに感謝が絶えなかったが、前任監督が亡き人となった今、思い返すと、何と手厚く支えてくださったのだろうと、頭が上がらない思いとともに彼の豪快な笑い声を思い出す。

前任監督の橋渡しもあり、新参者の私が、多世代に渡る陸上チームを編成することができた。その後、現在に至るまで、10年を超えて陸上チームの監督が続いている。毎年、市民体育大会の季節になると、地区全域から情報を集め、何十件も電話をし、お願いし、紹介され、出向き、対面で話し、チームに参加してもらう、ということを繰り返してきた。この営みのおかげで、私は地区全域の各世代にわたって、顔見知りを増やすこととなった。10年も続ければ、世代交代とともに、若者から親世代まで、多数の人と濃く関わることとなる。

2. 事務局長、マネジメント

陸上監督として体協との関わりを深めると、次の展開は、またしても向こうからやってきた。まるで自然な流れのように体協事務局に名を連ね、地区体育祭の50周年を迎える年には、事務局長への就任を要請された。周年事業の年という困難さは、戸惑いとともに挑戦心を掻き立て、未知の大役を引き受けた。地区を構成する18町内の代表からなる常任理事会を段取り、進行するのが当時の事務局長の役割だった。

会議を進行し、町内代表の人と言葉を交わす機会を積み重ねる中で、私の中で、地域社会というものが、網の目のようにつながりが広がっているという具体的な像を帯びていった。また、会議は常に公民館で開かれるため、公民館に出入りする機会は格段に増え、そこに集う地域活動に熱心な他分野の人たちとも顔見知りになり、声をかけていただくことも増えていった。人が人につながり、信頼しあいながら、紹介しあい、そうやって広がったつながりに支えられて、私が子供の頃から馴染んでいた様々な地域イベントが成り立っているのだと実感するようになった。

当時の私は、企業経営におけるマネジメントシステムを構築するコンサルタントを職業としており、組織の課題を抽出して、より良いシステム、仕組みを構築することで、課題を解決することが大切であるという価値観を強く持っていた。そのため、事務局長になって、50周年記念事業をするにあたって、次年度の体制を考えるにあたって、目的と課題を明示し、いかにわかりやすく解決の道を示すかに意識が集中してい

た。当時の私は、それである程度の成果を取めていると感じていた。今にして思えば、若輩者の自信過剰にすぎなかったのだが。

課題を明示し、解決プロセスと役割分担を共有することで、確かに新たな現実を生み出すことができた。周年事業は成功したし、体協の体制を刷新することもできた。しかし、組織を動かし、変化を起こすのに本当に必要なことは、システムという形ではないし、システムを構築する人間でもなかったと、後に気付くことになる。

3. 後援会会長、雰囲気づくり

体育協会事務局長と並行するように、幼稚園における保護者組織である後援会の役員に選任された。体協人脈を通じて声がかかり、わけもわからず引き受けた。体協のように、地域社会に広い人的ネットワークを持つ組織に関わると、スポーツ以外の分野でも、関わりの広がりが生まれてくる。

幼稚園の後援会は、体協と違って、若い世代の集まりであり、親という立場に初めてなった私のような人も多数いる。体協や地域社会のように、その分野の経験の長い先輩はいない。幼稚園の先生が段取りしてくださった流れに従って取り組んでいくか、少し経験の長い役員の方の先輩の声に従っていくか、いずれにしても、主体的に何かを判断するということは、なかった。

エスカレーターに乗ったように、次年度には副会長になり、役員3年目で会長に就任した。2年間の役員経験をふまえての会長就任だったので、ささやかながら主体的に判断して務めようという意欲も生まれていた。行事や体制を変えることはできないけれど、雰囲気明るく、やわらかく、活気のあるものにしたいと思って、幾度も巡ってくる会議や行事の席での会長挨拶を、ざっくばらんな語りかけるような内容にした。語りかける言葉の力で場の雰囲気を柔らかくしようと心がけていた。隣接する小学校との共催の親睦球技大会でチームとしての結束を高めようと試みたり、友愛セール（バザー）の売り上げを高めようと鼓舞したりした。いずれも例年以上の成果を取めることができ、場の雰囲気の持つ力を実感した。

忘れてはいけないのは、私は言葉を発しただけであって、それを受け止めてくれる役員仲間の力が結果を生み出していったということだ。私には言葉はあっても、実行力はなかった。

4. 町内会計、緻密、溜め

体協事務局長、後援会会長と相前後するように、自分が住む町内の会計を任された。区長、副区長、事務局長と並ぶ町内四役であり、当時の他の四役はいずれも

私の親世代に近く、異例の若さでの会計就任だった。これも、当時の区長が体協のOBであり、体協ネットワークからの広がりだった。もうひとつ、私の祖父も父も区長経験者であり、上の世代のつながりからの展開でもあった。

前任者から引き継いだ会計資料を繰りながら、私の中で幼少時の記憶がよみがえった。子どものころ、祖父は長く区長の職にあり、いつも細かく書き込んだ資料を作り、読み返し、それを持って度々会議に出かけていた。父が区長を務めていた頃、私は県外にいたので、その仕事ぶりは知らないが、祖父が区長の頃、父は子ども会会長だったので、同じように、何か書類を作ってファイルにしていた。会計資料のまとめを父が作り、私が近所に配り歩いたこともあった。祖父の机にも、父の机にも、いつも何かの書類があった。そんな記憶がよみがえった。

日常の入出金処理をし、帳票を整理し、帳簿につけていく。出金予測を立て、予算との乖離具合を確かめ、超過する場合は、他の科目からの転用を準備する。毎月、四役会が開かれ、会計の状況について報告、相談、新たな展開へ段取りをする。そのように、会計の毎日が過ぎていった。

会計業務そのものは、以前、務めていた会社で経理を担当していた時期があったため、その頃の勘を取り戻せば、さほど大変なこともなかった。むしろ、久しぶりに感じる、緻密に積み上げていく快感のようなものがあつた。計画し、チェックし、軌道修正する。そのような営みを正確に積み上げていくことは、お金という狭い範囲に限るからこそできるのだが、だからこそ、生々しい人間関係にはないシンプルな快楽があつた。このシンプルさと対照をなしたのが、四役会であり、様々な町内行事だった。現況が最善のものでなく、改善策が見つかりそうだけど、そう簡単には改善されない。様々な人間関係や事情の中で、やんわりと、ゆつたりと実行に移されていく。急激な変革が行われることは、まずなかった。より正しいことが実行されるのではなく、より持続性の高いことこそが実行される。私の目には、町内の営みは、そのように映った。まだ若かった私には、その展開の遅さに苛立ちを感じることもあつたが、ずっと同じ土地に住み続ける住民同士の関係のあり方を学んだ気がする。ことを急がない、現実に対する「溜め」のようなものが、地域社会の先輩にはあるのだと感じさせられた。

5. PTA広報部長、俯瞰

娘が小学生になってからの3年間は、PTA行事には、一般会員として参加するのみだった。幼稚園の後援会会長をしていた時には、いつも何かに忙しくしていた気がするが、役員を離れて一般会員になってみると、

PTAというのは、いつの間にか、自分の知らないところで回っているんだなと、他人事のように感じるようになっていた。そのような3年間が終わろうとする頃、幼稚園後援会の役員仲間からPTA役員への就任依頼の連絡が届いた。体協にせよ、幼稚園後援会にせよ、町内会計にせよ、いつも、何かのつながりの中で次の展開がやってくる。

新たな役割は、PTA広報部長だった。年に3回発行される広報紙の企画・編集を先生・保護者と一緒に行う。私は、当時、広報紙をまともに読んだことがなかった。そんな私が部長になっても、ちゃんと広報紙は編集され、発行されていく。なぜなら、広報部担当の先生方がベテランで、知り尽くしているから。私の仕事は、少しでも部員（保護者）が意見を言いやすい雰囲気を作り、記事内容やレイアウトに反映させていくことだった。強固な骨組みがあり、そこに何を肉付けしていくのかに、新しい意見を取り込んでいくだけでよかったので、活動は安定した。

しかし、これまでに作り上げられてきた強固な骨組みに頼っているだけでは、ルールの上を走っているだけで、自分がどこをなぜ走っているのかがわからないもどかしさがあった。第1号を無事に発行し、第2号に取り掛かっている頃には、学校とPTAと家庭をつなぐ役割を広報を通じて果たそうという意識がようやく芽生えた。だからと言って、何ができたわけでもないのだが、部長として主体的にハンドルを握り始めた感触があった。第3号の編集会議は、これまでで一番の熱気を帯び、「ありがとう」という統一テーマのもと一貫性の高い紙面を創り上げることができた。関わったみんなの満足度は非常に高いものになった。

年度が終わりに近づき、次の部長候補も決まり、引き継ぎの準備を進める頃になって、ようやく、私の目には、PTAの中の広報部の役割と仕事の流れが俯瞰されて映るようになった。この俯瞰の感覚をこそ引き継ぎようと、1枚の紙に広報のすべてを図解して引き継ぎ資料とした。時間の流れの中に、他の部や先生との関わりを示し、いつ、何を、どのようにすればいいかを示した。広報部長を終える時になってようやく、広報部とは何だったのかがわかった。しかし、PTAを俯瞰することは、当然ながら、まだできていなかった。

6. 主任児童委員、地域と教育が重なりはじめる

広報部長を務めていた頃、公民館長と民生委員長から主任児童委員への就任を依頼された。初めて聞く役職名で、そんな役割を担っている人が地域にいることを知らなかった。地区ごとに民生委員が置かれていて、一人暮らしの高齢者や障がい者など、見守りが必要な人、家庭へのサポートを行っているのは知っていたが、主任児童委員は同じような役割を子どもを対象に務め

るということを後になって理解した。依頼された当初は、公民館長も民生委員長も体育協会のOBであり、これまでも度々あった体協ネットワークからの依頼で、断る余地はないと思い、引き受けた。

毎月開かれている民生委員の定例会に参加すると、ほとんどが親世代の人たちだった。同級生の親が何人もいたし、地区を超えた研修に参加すれば、中学の時の体育の先生に再会したりして、私は群を抜いて若輩だった。親世代で、地域活動に熱心な人とのつながりがまたしても広がっていった。

主任児童委員になれば、公民館運営協議会や中学校の地域学校協議会の委員も務めることになる。ここで、社会教育、学校教育、地域社会の重なり合いの場に自分が立っていることに気がつくようになった。PTA広報部長を務めながら小学校の教育現場に関わり、主任児童委員を務めながら公民館や中学校の運営を垣間見る立場となっていた。一人娘が小学生なのに、早々と進学先の中学校の教育について話しあえる場に参加できたのは、学校教育における長期的な視点を獲得するために非常に貴重な経験となった。主任児童委員の任期は3年であり、毎月の定例会や不定期の研修を重ねるにつれて、PTAという組織を広く地域社会の中に位置づけて考えられるようになっていったように思う。

7. PTA副会長、サポート役の戸惑い

もう1回広報部長をすれば、きつともっと有意義な活動が展開できるだろうと思っていたが、私に次に与えられた役割は広報部と保体部を管轄する副会長だった。副会長は、管轄する部の活動をサポートすると理解して引き受けたのだが、このサポートというスタンスに戸惑い続けた。

広報部の活動は、1年間の経験があり、最後の最後になって俯瞰して全体像をつかんだ実感もあったので、自分が部長をするなら、あれこれできるのだが、自分から引き継いだ部長はじめ部員が動きやすいように、何をどうすればいいのかわからなくなってしまった。前広報部長として出過ぎれば、みんなの力を引き出せないし、かといって知ってるくせに黙っているというのも、もどかしかった。怪我の功名か、2回ほど部会に出席できないことが続いて、久しぶりに出席したら、すっかり部長のペース、雰囲気が出来上がっていて、「何だ、私は、もっと遠くから見ればよかったのか」と、それまでの自分の距離感が近すぎたことを理解した。気持ちを伝えて、手を離して、遠くで見守ればよかったのだと思った。

保体部の活動は、まったく未経験で、何かをしようにも、見守る以外にすることがなかった。部長の方から相談を持ちかけてくれることがあったので、知らないなりに耳を傾けて、俯瞰的に図解して、仕事の全体

像を整理するサポートができたことがあった。一步引いて見ているからこそ見えることがあり、未経験だからこそ前例にこだわらずに整理できることがあった。保体部は、子どもたちの体育大会のバックアップ、保護者と先生の親睦球技大会、市PTA連合会の球技大会と、関わる人数が他の部に比べて格段に多く、「大会」ゆえに熱気の広がりやすい部だということも学んだ。多くの人が集う場に熱気が宿れば、次の活動の熱気へと連鎖していくような、つながりによる熱気の連鎖を感じた。

広報部と保体部のサポートは、有能な部長のおかげで、私が何かをする前に、ちゃんと成立してくれた。いずれも、一步引いたところから見守り、必要に応じて俯瞰的なサポートをすれば、力強く前進してくれた。しかし、ならば副会長としての私の役割は何だったのだろうという戸惑いは残った。部長、部員が懸命に働いているのに、こんなに楽をしていていいのだろうかと思苦しかった。

PTA全体の動きは、年に7度開かれる運営委員会によって、審議・承認・管理されていく。運営委員会には会長、副会長、校長、教頭、各部と各学年の代表が一堂に会し、これから行われる事業の企画を審議し、全体で支えるべき事業は役割分担がなされ、終了した事業の総括がなされる。広報部長の時からこの会議に出席していたが、淡々と進行し、何かを審議する場というよりは、報告し、依頼し、確認していく場だと捉えていた。副会長として出席しても、その捉え方が変わることはなく、もう少し、ダイナミックな活き活きした場にできないかと思っていた。せつかく中枢役員が集うのだから、互いに元気を与えあうような活気が欲しかったのだが、何をどうすればいいのか、まだ見えなかった。副会長としての1年間は、戸惑いの中で終わりに向かっていった。

8. PTA会長予定者、難航の理由

副会長の任期が終盤にさしかかった11月。次年度会長就任への打診があった。PTA役員になって2年間で過ぎようとしていて、1年経った時には、もう一度広報部長ならもっとできるはず、という思いを残して副会長になり、2年が経とうとしている頃には、副会長って何だろうという戸惑いの中にいた。他にも会長候補がいたため、しばらく迷っていたが、これまでに残してきた思いや戸惑いに自分なりの決着をつけたいという思いが頭をもたげ、次年度会長予定者を引き受けた。正式に会長になるのは、翌年4月の総会承認においてだが、会長予定者になった時点から、組織作りは本格的に始動してくことになる。

組織作りとは、副会長はじめ、部長、副部長、学年委員長、副委員長をあらゆるネットワークを通じて、

選び、お願いし、承諾してもらったまでの粘り強い働きかけに他ならない。これまでのPTA活動を通じて出会った人はもちろん、体協、幼稚園後援会など、幅広く見渡して、自分の思いを受け止めてくれそうな人をお願いをしていった。私ひとりで進めるわけではなく、現職の主要役員のネットワークに助けをもらいながら進めた。

組織作りが難航するのは例年のことで、簡単には引き受けてもらえない。これまでのPTA活動をふりかえって、組織作りが難航する理由を考えると、ふたつのことが思い浮かぶ。ひとつは、PTA役員ネットワークは、想像していた以上に狭く、そういう役を担ってくれそうな無理を聞いてくれそうな仲間内に閉じていること。もうひとつは、PTA活動の意義や魅力が深くは理解されていないこと。どちらかといえば、窮屈で大変な活動という理解が広がっているように見受けられた。たいてい意義や魅力を感じられない活動が広がっていくはずがない。これは残念な現状だったが、裏を返せば、意義や魅力を感じられるようにすれば広がっていくことであり、私はそこに注目した。いったいPTAとは何のためにあるのか、何をなすうのか、ということを考え始めた。

9. 会長方針、「フワッ、ギュッ、ドカン！」

PTAは何のためにあるのかを考え始めてから、自分なりの答えが出るまでに時間はかからなかった。答えは「つながりの広がり」だった。

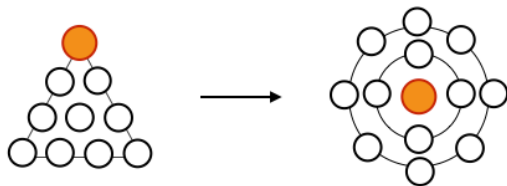
体協、幼稚園後援会、主任児童委員など、様々な分野で地域の多様な人たちと関わりを深めながら、私の中には、広いつながりの中にいるということの安心感が芽生えていた。地域のどこに行っても、どんな活動をして、声をかけてくれる人や手を差し伸べてくれる人がいるということが、どれだけ心強いことかを実感していた。だから、子どもたちを広くてやわらかくてあたたかいつながりの輪の中で守ろうと思った。そういうつながりの輪の中でこそ、子どもたちは安全に、安心して成長してくれるはずだから。どこに行っても、何をしていても、誰かが声をかけ、手を差し伸べてくれるような、つながりの輪を創ろうと思った。

「つながりの広がりこそ子どもたちの成長を支える」のだから、PTAの究極の目的は「つながりの広がりを生み出すこと」だと確信した。その確信を、会長としての方針に表現した。平成27年度のPATの方針を「フワッとつながって、ギュッと話しあって、ドカン！と実行する」、略して「フワッ、ギュッ、ドカン！」と掲げた。「フワッとつながって」は、あたたかくてやわらかなつながりを広げたいという思いを、「ギュッと話しあって」は、前例や形式にとらわれずに、本当に必要なことを密度濃く話しあいたいという思いを、

「ドカン！と実行する」は、決めたことは勇気を持って本気で実現を目指すという思いを込めた。とことん突き詰めて、削り出した結果の、シンプルで単純な表現なら、会長としての私の中にしっかりと根を下ろして、いつもそこに立ち返って、役員や子どもたちに接することができるはずだと思った。

10. 組織図を描く、サンカクからマルへ

「フワッ、ギュッ、ドカン！」という言葉だけでなく、それを象徴するような何かシンボリックな表現を探していた。組織図が目に入った。従来の組織図は、どこにでもあるピラミッド型だった。会長を頂点に、下に役員の階層が重なる。「つながりの広がり」を想起させる形ではないと思った。このサンカクは、私の目指す組織の姿とは違うと感じた。すぐにマルの組織図を思いついた。会長としての私は、頂点ではなく中心にいる。その外周を副会長が輪になって囲み、さらにその外周を各部、各学年が輪になって囲む。同心の輪が重なり、広がっていくイメージこそ、私が目指す「フワッ、ギュッ、ドカン！」の組織の形だった。強力なリーダーシップというより、思いの共鳴を生み出すリーダーシップを目指そうと思った。



11. 方針を語り、組織を語る

私の目指す方針と組織の形を書面に整理した。まずは、副会長はじめ役員に共感してもらわなければならなかった。「つながりの広がりこそが子どもたちの成長を支える」だから「フワッ、ギュッ、ドカン！」で「マルの組織図」なんだと繰り返し語り続けた。はじめは、主要役員だけの場で、次に全役員の中で、さらに全保護者を対象とした総会の場で語り続けた。

方針と組織を示した資料や私の語りが、どれだけ聴き手に届いたのかは、この時点ではわからなかった。ただ、繰り返し語り続けることで、方針と組織図は、私の根源的な願いとして深く心に根を下ろすこととなった。「つながりこそが大切なんです」「僕は円の真ん中にいます、絶対に逃げません。全責任は僕にあります。だから、みなさん、自在に考えて、活動を展開してってください。お願いします」と語った。その語りは、他の誰よりも、私自身のあり方を規定するものとして、1年間にわたって、心に響き続けた。どんな

事業をするにあたって、どんな困難に向きあうにあたって、会長としての自分がすべきことは何かと、この方針と組織図に向きあって自問し続けた。私は方針を掲げ、実現の雰囲気を作る。みなさんに実現をお願いする。副会長はじめとして役員が、具体的な現実を生み出してくれる。だから、私は、強く念じ、語り、深くお願いする。そういう姿勢が時の経過とともに自分の中で鮮明になっていくのを感じた。

後になってわかったことだが、会長就任前後の方針や組織についての語りは、少なくない反響を呼んだ。幾人もの人に強い印象を残した。型通りの挨拶は何一つしなかった。何も読まなかった、ただ願いを語っただけだった。PTA会長は、多くの保護者、子どもたちの前で話をする機会が度々あるが、私は、この総会での語りのスタンスを貫こうと思った。会長挨拶とは、挨拶をするためではなく、願いを届け共有するためにこそあるのだと思った。

12. 物語をともに紡ぐ

PTAには奉仕作業があり、体育大会があり、親睦球技大会があり、広報紙発行があり、キックベース大会がある。他にもいくつもの行事がある。私は、それらの行事をひとつひとつの単独の行事として捉えるのではなく、1年間続く、大きな物語のように捉えて、そのような捉え方を、役員の中で共有したいと思った。行事を積み重ねるにつれて、つながりが細やかに広がっていき、あたたかさや柔らかさを増していくようなイメージを共有したかった。

行事の度に、この行事の全体の中の位置付けと次の行事へのつながりを語るようにした。奉仕作業と体育大会と親睦球技大会は内容の関連性は低いが、奉仕作業と一緒に学校を綺麗にしながら生まれたつながりを生かして、子どもたちの体育大会を盛り上げて、その勢いを親睦球技大会でさらに膨らませる。そのようなイメージを語った。

ある行事を管轄する部から、次の行事を管轄する部へ、次々とバトンを渡していく。1年間のPTA活動という、ひとつの大きな物語を、バトンを渡しながらか、部を超えてみんなで描き出していくイメージ。私は、そのような大きな物語をともに紡いでいく仲間としてPTAを捉えようとしていた。

この捉え方が、直接的に具体的な成果をもたらしたわけではなかったと思う。しかし、いつも私の語りが一番近くで聴いてくれていた副会長3人は、私の抽象的な語りを、担当する部の具体的な事業へと展開しようとしてくれたし、後々、様々な新しい現実を生み出してくれることとなった。

13. 願いのタネをまき、舞台を整える

会長に就任する直前に、方針や組織図に思いをめぐらせながら、いくつかの実現したいアイデアが生まれていた。体育大会のPTA種目新設、子どもたちの壁新聞の取り組み活性化、奉仕作業やベルマーク集計のような地味で地道な活動にこそつながりを広げるヒントがあること、広報紙を通じてPTA活動の魅力を伝えること、教養部の事業の拡大強化など。

子どもたちの体育大会には、最も多くの保護者が集うのに、不思議なことに、これまで保護者のための種目はなかった。幼稚園にはあった。運営をサポートするのがPTAの仕事なのだが、せつかく1年で一番保護者が集まる機会なのだから、保護者と先生のための競技を新設したいと思った。大人が本気で楽しんでいる姿を子どもたちに見てもらいたいし、大人のつながりが広がる機会にしたいと思った。学校に急な申し入れをして、新種目の枠を確保した。運営委員会で、PTA種目の新設を宣言し、そこからの具体的な実現は、保体部と担当副会長に委ねた。

壁新聞はこれまで、ほとんど取り組まれていなかった。市内最大の小学校にもかかわらず、壁新聞コンクールへの出展は、ごくわずかだった。私は小学生の頃、一度だけ、町内の子ども会で壁新聞を作って、何かの賞をもらったことがあった。家に町内の小学生が集まり、協力して1枚の壁新聞を作った。みんなで書いたり、切ったり、貼ったり、学校とは違う楽しさや充実感があった。壁新聞の講師をしている人が、私の地区で壁新聞が盛んでないのを嘆き、ぜひ、やって欲しいと言っていることを人づてに聞いた。その講師は、たまたま、私の知り合いだった。壁新聞でつながりの広がりを生み出せると直感した。早速、講座の依頼をした。公民館の主事さんが講座を開きたいと思っていることも知った。話がつながった。運営委員会で「今年は壁新聞に力を入れたいです」とお願いし、後の具体的な展開は子ども会を管轄する社会部と担当副会長、それから公民館に委ねた。

施設部は学校施設を保護者が清掃する奉仕作業と、ベルマークを家庭から集めて集計し、学校に必要な備品と交換していく活動を担っていたが、いずれも地味で地道な活動だった。しかし私は、このような活動にこそPTAを活性化するヒントがあると感じていた。見ず知らずの人とともに窓を拭き、ベルマークを数えるような活動が人と人の距離を近づけることを、これまでの経験から実感していた。施設部と担当副会長に、「ベルマークを数えるような地味な活動であっても、つながりを広げるきっかけにできるはずですよ」と無理なお願いをした。

広報紙は、自分が広報部長を経験していたこともあって、もっと編集の自由度が高いものにできるはず、PTA活動や子どもたちの姿をもっと生き生きと伝えられる

はずと思っていた。イラストなどグラフィック表現が得意な人に部長になってもらい、広報紙に果たしてほしい「学校とPTAと家庭をつなぐ」という役割を伝え、上で、「自由に、楽しんでやって！」とお願いし、後の具体的な展開は広報部と担当副会長に委ねた。

教養部は例年、講演会や演奏会など、保護者の勉強や交流のための行事を企画・運営していた。何を企画してもいいのに、私の目には、これまでの教養部は、その自由度が生かしきれていないように映っていた。だからこそ「つながりの広がり」「フワッ、ギュッ、ドカン！」を現実化するような何か大きなことを期待したかった。学校と相談の上、教養部の予算を前年の3倍にし、教養部員を各学年の正副委員長で構成した。運営委員会で、「思い切って、ドカン！と何かやってください」とお願いし、そこからの具体的な展開は、教養部と担当副会長に委ねた。

体育大会のPTA種目はわずかな準備期間にもかかわらず実現し、新年度早々に「PTAは新しいことに挑戦していけばいいんだ」という空気を生み出した。壁新聞は、公民館に複数の町内の小学生が集って競いあって作成するという、講師も注目した新しいスタイルの講座が生まれ、入賞が続出した。奉仕作業とベルマーク活動は、近年にない多数の参加者を集め、地味で地道な作業を和やかに成し遂げながらPTAのつながりの基盤を創った。教養部の事業は、地域を巻き込んだ夏祭りとして巨大なイベントに膨らんだ。地域の協力も得て、PTAの総力を結集してやり遂げた。こうやって次々に生み出されていく新しい成果を、広報紙は従来の編集枠を自在に変更して記事にしてくれた。表紙は手書きイラストになり、いつも「フワッ、ギュッ、ドカン！」という方針が表紙のどこかに記載され、みんなでPTA活動を作り上げているという雰囲気家庭に届け続けた。

私がしたことは、「つながりの広がり」という方針を具体化できそうなアイデアのタネを選び、実現への願いを込めて担当者に委ね、活躍しやすいような舞台を整えようと試みたに過ぎない。

いや、私は活躍しやすい雰囲気は創ったかもしれないが、舞台は整えていない。唐突に降ってくる私のアイデアを受け止める舞台裏には、目立たぬよう緻密な段取りをするペースメーカー的な総務部長と、率直な言動でチームに勢いをもたらすムードメーカー的な総務副部長の存在が常にあった。このふたりが舞台裏の安定感を生み出し、その舞台の上で副会長をはじめとした役員が力強く展開していった。私には計画力も、実行力も、実現力もなかった。私は願い続け、次々に生み出されていく現実に、ただただ驚嘆し、感謝するばかりだった。

14. 願いがタネをもたらす、思いがつながる

アイデアのタネは、私の中だけにあるわけではなかった。教養部の事業を拡大強化したいという思いと、実行力を高めるために部員を学年の代表で構成するというアイデアは確かに当初から私の中にあったが、予算を大幅増額するというアイデアはなかった。PTAの予算構成は理解していたが、それに大胆に手をつけるというところまでは思いが及んでいなかった。そこまでしていいと思っていなかった。

アイデアのタネは副会長からもたらされた。私が教養部の事業に力を入れたい、「つながりの広がり」を実現するような何かをやりたいと、副会長に強く伝えていた時に、「予算は増やせないですか」と問い返された。その時に、遅ればせながら、予算を増額することで、実現への道を大きく拓きうるということに気づかされた。その副会長は会社経営者だった。経営者感覚から見れば当然のことが、私の目には見えていなかった。願いがあれば、願いを語れば、アイデアのタネは、外からもたらされるのだと思った。

親睦球技大会でも同じようなことが起きた。6月に保護者と先生の親睦のための球技大会がある。恒例行事で、学年対抗で行われるので、ここで学年の結束が高まる。例年、活況を呈するのだが、今年は私が属する6年生の盛り上がりが見えず、会場の空気を変えてしまような状態だった。見事優勝した。打ち上げにその盛り上がりを引き継がれたのはもちろん、学年が入り乱れての酒宴となった。なんて素晴らしい雰囲気なんだと思った。役員もそうでない人も笑顔で交わり、はしゃぎ、語りあっている。私は、このようなつながりの広がり求めていたんだと再確認したし、こういう経験をまたしたいと思った。その時、その場にいた何人かが「市P連で勝ちたい」と言った。市P連で勝つとは、毎年11月に開催される市PTA連合会の球技大会で優勝することを意味していた。その瞬間、私は決めた。「市P連で勝つ」と。

この決意には背景がある。会長になった直後、顧問に就任してもらっていた中学校の元PTA会長から「市内で一番大きな小学校なのに、市P連球技大会での盛り上がりがない。もっと活気を出せるはず」と指摘されていた。まだ春であったにもかかわらず、私はすぐに学校に相談し、11月の市P連球技大会に先生もたくさん参加して欲しいとお願いした。さらに、運営委員会で、今年は市P連球技大会に力を入れると宣言してもらった。ただその時は、参加者を増やして、みんなで盛り上がり、という意味でしかなかった。私の記憶する限り、こしばらく、市P連での勝利には縁がなかったのだから。

6月の打ち上げの盛り上がりの中で、「市P連で勝ちたい」という声を聞き、顧問からの声がよく響き、思いがつながり、「市P連で勝つ」という決意が生ま

れた。すぐに保体部長と担当副会長に「市P連は、勝ちにってください」と強くお願いした。

11月の市P連球技大会、我が校PTAチームは、見事に5年ぶりの優勝を成し遂げた。勝ちにあって、本当に勝った。参加者が増えればいいという私の当初の思いは、何人もの思いとつながって、素晴らしい現実を生み出してくれた。願いを語れば、誰かが育ててくれるのだと思った。

15. 想定をこえた提案、肚を決める

5月中旬、前述の教養部事業の拡大強化の件で、「夏祭りをして、夜は校庭で映画を観る」という企画が運営委員会に持ち込まれた。私は不意を突かれた。想定を超えていた。他地区では例のある企画だとしても、PTAが主催するという話は聞いたことがなかったし、夏は目前に迫っていて、準備期間があまりに短かった。まったく未経験で、かなり大規模な行事を、この短期間でやり遂げられるのかと不安がよぎった。しかし、もし祭りを成功させることができれば、地域のつながりの輪を一気に広げることができるような予感もまた、あった。会議の場には、特に異論が出されなかった。このままでは、実行に向けてスタートすることになる。このリスクの大きな挑戦にストップをかけられるのは、この場では、私しかいないと思った。もっと簡単に大勢の人が和やかにつながれる企画も、考えれば出てくるのではないかと思った。しかし、私は異議を挟まなかった。企画は承認され、実現に向けて一気に動き出すことになった。

私が異議を挟まなかったのは、この企画に予感される大きな可能性に賭けたかったこと、それから、やったことのないことや難しいことでも、本気で実現しようとする大人の姿を子どもたちに見せたいと思ったからだ。先のことを考えると怖かったけれど、「ドカン!と実行する」という方針を体現すると、肚を決めた。自分には力がないけれど、仲間を期待して委ねて、そこから生まれる力を信じようと思った。

肚を決めた後、あらためて企画を見つめて思ったのは、こういう展開が生まれる組織をこそ、私は創りたかったのだということだった。私の想定する中でだけ提案が生まれ、無難に実行される組織ではなく、私に不意打ちをくらすような提案が出てきて、みんなの勇気を集めて実現に向かっていく組織をこそ創りたかったのだということを思い出した。不安な顔も役員の中に混じる中、「僕は絶対に円の真ん中から逃げませんから、子どもたちのための祭りを実現しましょう。きつとできます」と宣言した。教養部を超えて、PTAの総力を結集するプロジェクトになった。

16. 夏祭り、復活へ動く

祭りの実現に向けての中心的な動きは、教養部と担当副会長に委ねはしたが、会長としてすべきことが、願ひ祈ることだけではないということもわかってきた。PTAだけに話をとどめるには行事の影響力が大きすぎた。夏祭りをするとなれば、地域全体に影響が及ぶ。企画が承認されて間もなく、私は公民館長を訪ねた。

地域の協力をお願いしたかったのはもちろん、子供の頃の思い出がよみがえったからだ。私が子供の頃、地区全体の納涼祭が小学校の校庭で毎年、開催されていた。中央には櫓が生まれ、太鼓がたたかれ、その周りを盆踊りの輪が囲んだ。祖父は盆踊りの審査員をしていた。あの祭りはいつの間になくなったのかを知りたかった。

確かに館長も覚えていた。しかし10年以上前に、地域全体の納涼祭はなくなっていた。以来、町内ごとの納涼祭が開催されていた。全体の祭りから、分散の祭りへと地域の事情は展開していた。館長や当時のことを知る人と話していると、また全体の祭りができればいい、という希望が地域に潜在しているように感じた。古い資料を読んでいて、ひとつ発見した。14年前に、まだ地区全体の納涼祭が開かれていた頃、大スクリーンを設置してみんなで映画を観るという企画が実現していた。私たちPTAがやろうとしていることは、地域の力ですでに14年前に実現していた。この発見は私に勇気を与えた。「祭りを復活させる」と強く決意した。公民館で地域の経緯、実情の感触をつかむことができた。その上で、地域の代表の方々をお願いをするという展開にできたのは、非常にありがたかった。次は、自治振興会へのお願いだった。

17. 地域の力とつながる、膨らむ

公民館の次に、自治振興会に祭りの企画を持ち込んだ。自治振興会とは、各町内の区長をはじめ、各種団体の長、専門部の部長が集う組織である。ふるさと文化部や青少年育成部など、専門部に分かれて、地域の課題解決や理想実現に向けて、地区全体の協働を生み出している。小学校のPTA会長は、自治振興会の副会長を兼ねることになっていた。他にも壮年会など各種団体の長が副会長に名を連ねる。月に一度、役員が一堂に会する幹事会が開かれる。

新参者の副会長である私は、まだ名前を覚えてもらったかどうか怪しい時期に、この幹事会の場で、祭りの企画を紹介し、協力をお願いした。具体的な協力というよりも、若い世代の団体であるPTAが大きな挑戦をするので、地域の先輩としてのご指導、見守りをお願いしたつもりだった。企画は好意的に受け止められ、PTAの祭りと町内の祭りの日程が重なっていたケースは町内の日程を変更していただき、ふるさと文化部と

青少年育成部、老人会からは、「昔遊びコーナー」の出展したいという申し出までいただいた。区長を始め、地域を支えている皆さんが集う自治振興会に好意的に受け止められただけでなく、具体的な協力の申し出までいただき、企画は実現に向けて大きく動き出した。

企画は、さらに展開した。祭りの日程とスポーツ少年団の練習日程が重なっていた。スポーツ少年団の会議に参加し、練習日程への考慮を求めた。子どもたちが祭りに参加しやすいように日程や時間を変更して欲しいというお願いをしたつもりだったが、予想を超えて、団員募集のための「体験コーナー」を出展したいという申し出をいただいた。

公民館、自治振興会、スポーツ少年団、次々と地域の力をいただき、PTAの夏祭りは、巨大イベントへと膨らんでいった。

私が夏祭りへの協力を地域にお願いしている間にも、PTA内部で準備は着々と、いや手探りで進められていた。統括の任にあたった担当副会長が、見事な実行力、実現力を発揮し、祭りの姿が次第に鮮明に描き出されていった。PTA役員による「ゲームコーナー」、自治振興会による「昔遊びコーナー」、地元飲食店による「飲食コーナー」、地元建設会社による「働く車コーナー」、スポーツ少年団による「体験コーナー」、地元大学による「よきこい」、公民館の教室に通う子どもたちの「剣舞披露」。締めくくりは、校庭に設置する巨大スクリーンでの「映画鑑賞」。保護者を対象として行ったアンケートからは、1000名以上の来場が予想された。地区の屋外イベントとしては、体育祭を超え、最大規模に膨らんでいた。夏祭りは、「復活！国高っ子の夏祭り～星降る夜に映画を観よう～」と名付けられた。

18. 注目が引き出す力

夏祭りの開催を1ヶ月後に控えた7月上旬、我が校PTAの取り組みを地域外に向けて広く発信する機会があった。幸か不幸か、滅多に巡ってこない県PTA連合会のブロック別研修の発表担当校に我が校が当たっていた。県内をいくつかのブロックに分けて、ブロック内の学校が持ち回りでPTAの事例発表をする会だった。我が校PTAは、新しい取り組み、方針、組織、そして夏祭りへの挑戦を発表することにした。

夏祭りの準備で走り回っている時期と発表の準備の時期がきれいに重なった。多忙に多忙が重なった。重圧に重圧が重なった。しかし、準備に走り回りながら、発表の準備をすることは、立ち止まって冷静に、自分たちの取り組みをふりかえる貴重な機会になった。どんなPTAを目指しているのか、なぜ夏祭りをするようになったのか、どうして地域の力とつながれたのか、成功の見通しはどうか等を、共に発表を担う副会

長、総務部長、副部長と共有しながら、今後の展開を見通すことができた。

ブロック内のPTA関係者が多数集う中で、この年のPTA活動の概要と、夏祭りに向けての動きを発表した。1000名以上の来場が予想されていること。地域の力とつながって巨大なイベントに膨れ上がっていることを公言した。これまでやってきたこと、これからやろうとしていることを、副会長ら仲間とともにステージから公言することで、一歩も引けない状況になった。怖いことでもあったけれど、むしろ、さらに覚悟が決まった。不思議なことに、私の脳裏には成功しているイメージが鮮明な色を帯び始めた。

地域でも公民館や自治振興会、町内への回覧を通じて、夏祭りの情報が広がっていった。「PTAが大きなことするらしいな」と声をかけられる機会が増えていった。注目と期待が集まっていることを肌で感じた。失敗する怖さよりも、地域の人の気持ちが集まってくる心強さを感じた。

注目と期待が集まっていることを運営委員会で伝えた。役員の本気がさらに増していくのを感じた。全体的な情報共有の後には、分散的な打ち合わせが自発的に広がっていった。みんな笑顔だった。挑む怖さより、挑む楽しさを感じた。最後の打ち合わせで宣言した。「この祭りの成功を確信しています。大人の本気を子どもたちに見せましょう」と。起きることすべてを受け止めて、一歩も退かない覚悟が決まった。

19. 祭りは、現実になった

夏祭りの当日は幸いにも晴天に恵まれた。朝から始まった準備に集った面々には高揚感があつた。もちろん、私にもあつた。何もなかった校庭に、次々とテントが、巨大スクリーンが立ち上がっていった。1日限りのお祭り広場が姿を現した。あちこちで、汗を流しながら、でも笑顔で準備に取り組む100人近いスタッフの姿があつた。心から感謝して、その光景を目に焼き付けた。

祭りの始まり。校庭の中心に立って、子どもたちに向かって「みんなのためだけに今日の祭りを準備してきた。楽しんでくれ」と宣言した。よさこいがあり、剣舞があり、ゲームコーナーにも、昔遊びコーナーにも、働く車コーナーも、スポ少体験コーナーにも笑顔と歓声が満ちた。子どもの笑顔と同じくらい、スタッフの笑顔があつた。飲食コーナーの前のテーブル席は家族連れでいっぱいになった。

祭りの締めくくり。巨大スクリーンで映画を観た。祭りの名前の通り、「星降る夜」のもとでの映画上映になった。校庭に敷かれたブルーシートやベンチには、1000人を超える人がいた。こんな光景は、未だ見たことがなかった。上映が終わり、みんなが帰路につく

姿を見送りながら、何事もなく家に着き、今日の思い出とともに眠りについて欲しいと願った。

片付けを終えて、仲間とささやかな打ち上げをした。確かにやり遂げたんだ、終わったんだ、という思いより、まだ祭りの続きの中にいるように感じた。ビールは美味しかった、話も弾んだ。しかし、終わった実感がなかった。本当に終わったのだろうかという思いが続いていた。

翌朝、仲間と共にゴミ拾いに集まった。拍子抜けするくらい、ゴミがなかった。仲間と笑顔で言葉を交わしたが、私はまだ祭りの中のように感じていた。終わっていなかった。家に帰った後、お昼から、校庭にひとりで佇んだ。巨大スクリーンの足場だけがあつた。ゴミ一つなかった。昨日、ここで起きたこと、やり遂げたことは、すべてが映画の中のこのように思い出された。私たちは巨大な一本の映画を地域ぐるみで創ったように感じた。しばらくして、担当副会長もやってきた。短く言葉を交わした。映画の中のセリフを語っているように響いた。

翌々日の登校日の朝、また校庭に立った。子どもたちが笑顔で登校してきていた。その光景を見て、ようやく、私の中で祭りが終わった。確かにやり遂げたんだと実感した。祭りの様子は新聞記事に大きく取り上げられ、ケーブルテレビでは繰り返し放送された。

3週間後、運営委員が集まっての正式な打ち上げをした。互いの苦労を語り、疲労を語り、達成を喜び、大いに笑った。新聞記事のことやケーブルテレビの放送のことも盛んに話題になった。誰もが、遠い昔のことを語っているように感じていた。今年度のPTAが発足した時に、影も形もなかった企画が、突如として姿を現し、あつという間に膨れ上がり、巨大イベントとして現実になった。信じられない思いだったが、どうやら本当だった。仲間の充実感に満ちた笑顔がそれを保証していた。「フワッとつながって、ギュッと話しあつて、ドカン！と実行する」という方針そのままの光景が、私の目の前にあつた。

20. 空手パンチ、合宿通学

9月には地域ぐるみの恒例行事として合宿通学が行われた。4年生の希望者が公民館に5日間の合宿をし、そこから小学校に通う。子どもたちにとって、おそらく初めての、長期間の家庭を離れる経験。各種団体が連携して行事を支える。PTAもスタッフの一員としてお風呂と夕食と就寝のパートを担当した。

開校式の前に男子の部屋を覗くと、子どもたちが群がってきて、「空手、空手」と叫びながら、パンチ、キックを浴びせられた。油断していた。本当に痛かった。子どもたちの躍動が嬉しかった。頼もしかった。地域の人たちが作ってくれた夕食と一緒に食べ、バス

で銭湯に行き、帰ったら百人一首をし、高揚して眠らない子どもたちを寝かしつけた。それでも眠らなかったが。

この合宿通学は、PTAにとっても貴重な体験になる。家庭も町内も超えて、地域の子どもたちと直接ふれあう機会であるだけでなく、地域の各種団体の人たちと協働する機会だからだ。PTAが外部とつながって何かをすることで、視界が開ける。子どもを寝かしつけている人、食事を作っている人、一緒に遊んでいる人、そんな人たちの姿を見ていると、みんなが子どもの幸せを願う地域の大人同士、仲間同士なんだということを思い出してくれる。子どもを通じて、地域の大人が心を通わすことができる。

21. 大人の壁新聞、文化祭

10月には地区文化祭があり、PTAもポップコーンを売ったり、地域のみなさんが出演するステージの運営、アナウンスを担う。例年はそうなのだが、私は、今年、どうしても、夏祭りが成功したお礼の気持ちを地域のみなさんに届けたかった。さらに、地域のみなさんへの取材があつて初めて完成した子どもたちの壁新聞がコンクールで多数入賞したことも報告したかった。

私は、子どもたちの壁新聞に触発されて、PTAも大人の壁新聞を創って文化祭に出展することを思いついた。祭りの様子を撮影した写真をモザイク状に貼りあわせて、子どもたちの壁新聞もその中に取り込んで巨大な掲示物を創ろうと思った。大まかなアイデアを副会長、総務部長に伝えただけで、文化祭前の運営委員会で唐突に「今日は会議を早く終わらせて、みんなで作るの時間にします」と宣言した。

私は、自分は強引に物事を進めるタイプではないと思っているし、実際にそんなことは滅多にしないのだが、稀に魅力的なアイデアが脳裏にイメージとしての像を結ぶと、丁寧な段取りを省略して一気に、直線的に実行に移してしまうことがある。この時に浮かんでいたイメージは、役員みんながハサミや糊を持って、ワイワイおしゃべりしながら簡単な工作して、大きな作品を共同製作することで、つながりが深まってく光景だった。大きな事業をやりとげれば結束は深まるが、日常的なちょっとしたことでも、それができるはずだと思っていた。

会議を終えた後の会議室には、本当にそういう光景が実現した。みんな簡単な工作を楽しんでいた。私がしたことは、冒頭の「工作します」宣言と、たくさん写真のプリントアウトと、完成イメージの説明だけだった。あとは、みんなが、自由に、自在に、和やかに創り出していった。意外な人が意外に細かいところにこだわっているのを発見したり、大胆に素早くリー

ダーシップを発揮する人がいたり、いつもと違う役員の表情があちこちに見られた。

地区文化祭当日には、「巨大」とまではいかないが、パネル4枚にわたって、手作りの掲示物を出展することができた。私は、PTAとして地域のみなさんに「お礼とご報告」ができたと感じたし、これを役員みんなと和やかにやり遂げたことが嬉しかった。

この掲示物は、文化祭を終えてからも小学校の廊下に掲示され続け、子どもたちにも届けることができた。PTA活動を地域の人や子どもたちに大きく発信する道を拓いた取り組みだった。この後、2学期末にもこのような掲示物を共同製作して校内掲示することができた。さらに、3学期末には、卒業生に向けた大事業へとつながっていった。後述するが、ちょっとした思いつきから始まった、ちょっとした工作は、地域を巻き込んだ想定外の大事業へと膨らんでいった。

22. 公民館、世代を超えて集積する人と情報

町内子供会を管轄するPTA社会部の活動は、この年、公民館との連携で大きく展開した。従来は、夏のキックベース大会と冬の卓球大会をメインとした活動だったが、今年、壁新聞教室とカルタ教室という新しい事業を生み出し、いずれも大きな成果を残した。

私は、以前、体育協会の事務局長をしていて、公民館にいかにも多くの情報と人が集積しているかを知っていたし、公民館長は元体協理事長だったし、この年の社会部長は体協事務局長でもあった。PTAと公民館の間に連携が生まれやすい状況にあった。そこに、たまたま私が壁新聞というタネを委ねたら、あっという間に他地区に例を見ないスタイルの壁新聞教室が生まれ、そこから福井新聞社長賞をはじめとして入賞が続出することとなった。入賞だけが成果ではなく、町内を超えて公民館に集合して競いあつて壁新聞を作るという新たな場を生み出したことが大きな成果だった。

さらにカルタ教室まで生まれた。これは公民館の主宰さんがアイデアとして温めていて、そこに社会部とのつながりの深まりがあり、百人一首ブームの追い風もあり、実を結ぶこととなった。私が小学生の頃は、町内の誰かの家に集まって、百人一首の練習をし、学校でも句の暗記を競いあい、地区の大会に備えていた思い出がある。いつの間にか廃れてしまっていたが、それがここで、町内を超えて公民館に集合して、みんなと競いあいながら百人一首の上達を目指す場が生まれた。毎週、まるで部活のように熱気を帯びた教室が継続され、新春の市のカルタ大会には見事4位入賞チームを輩出したし、公民館長杯として地区カルタ大会が復活した。

壁新聞とカルタが、町内を超えた集合型の教室として大きな盛り上がりを見せ、成果を取めることができ

たのは、公民館の全面バックアップによるところが大きかった。場所や道具を始め、様々な協力をいただいた。地域の人と情報が世代を超えて集積する公民館とのつながりを深めることで、PTA単体では生まれなかった展開が生まれる。人を紹介してもらえ、人に知らせてくれる、人と偶然出会う、地域の情報を知る、歴史を知る、そこから新しく何かが生まれる。PTA組織を内に閉じることなく、外に開き出し、様々な場にアクセスしていくことの可能性を感じた。

23. 地域外に開く、県P連、市P連、教職大学院

PTA活動と外部との接点は、公民館や自治振興会だけではない。先述の県PTAのブロック別研修における事例報告は、準備段階では貴重なふりかえりの機会になったし、多くの人に向かって公言することで自らを鼓舞する力になった。

また、夏祭りが成功裏に終わった後には、市PTA連合会の市長・教育長と語る会において、祭りの顛末を発表する機会を得た。この準備を通して、祭りのことを自分の中で総括することができたとし、市長、教育長、他校PTA会長と意見交換しながら、地域づくりとPTAの関係について、今まで漠然と考えていたことが明瞭な言葉になった。話しながら、思いがけず言葉が飛び出したような感覚だった。

いつもの通り、原稿なしに話していた私の口から、「我が校PTAは1000人の組織で、人口1万人の地区の1割に過ぎませんが、子どもの成長という、地域にとっても大切な願いをもとに結びついています。地域を動かすのに、過半数は要りません。はじめの一步は1割もいれば十分ではないでしょうか。PTAのつながりを広げれば、地域を動かす力を持ち得るはずですよ」という言葉が発せられていた。

そういうことをこれまでも思っていたような気もするが、こんなにはっきり言葉にしたことはなかった。市長、教育長、他校PTA会長という外部に向かって語る場だったからこそ、その場との関係の中でこそ、紡がれた言葉のような気がする。

もうひとつ、私にとって大切な地域外の間があった。福井大学教職大学院の客員・非常勤の控え室。そこには、毎週、客員・非常勤の先生が仕事の前に集う。先生方の中には、校長経験者が何人もいらっしや、私のPTA活動にまつわる相談にもならないつぶやきを幾度も聴いていただいた。学校のこともPTAのことも経験豊かな先生方に話し、助言をいただくことで、私は自分の置かれている状況を相対化し、焦点をクリアにし、次の一步への判断をすることができた。

地域外に自分の活動を開いていくことで、自分の内部が深まるきっかけを得られた。内部だけを見ていては、こういう展開が起きることはなかっただろう。

24. 唐突、「6年生におくる、みんなのことば」

PTAの3学期は、例年なら、大きな行事もなく、平穩に過ぎていく。1月下旬、PTAの新年会を終えた頃には、私は、最後の運営委員会で、この1年間を振り返って、なごやかに終わればいいなと、無難なことを考えていた。しかし、そうはならなかった。私は、急に、どうしても動きたくなくなってしまった。

この年は初の試みとしての公民館長杯カルタ大会が開かれた。大会の前日、「これで今年のPTAも終わるんだなあ」とひとりごちていた時に、「もう、これで終わっていいのかな」と思い始めた。「フワッとつながって、ギュッと話しあって、ドカン！と実行する」PTAの1年間の終わり方は、これでいいのかという思いが浮かんだ。取り組んだすべての行事は成功したし、例年にない新しい取り組みも生み出した。夏祭りや、合宿通学や、文化祭で地域とのつながりは深まった。壁新聞とカルタという、子どもたちと地域をつなぐ新しい場も生み出した。「でも、それでいいのかな」と思った。

最後の最後に、地域の大人の気持ちのつながりの広さとあたたかさを、子どもたちに感じて欲しいという思いが、唐突に思い浮かんだ。夜中、白い紙とサインペンを取り出し、降って湧いてきたアイディアを書き留めた。地域中から卒業をお祝いするメッセージカードを集めて、つなぎ合わせて、巨大な作品にする。卒業式を前に、地域の大人たちからの膨大なメッセージに埋め尽くされた壁画のような作品が、登校した子どもたちの目の前に突如として現れる。そんなイメージが鮮明に浮かんだ。つながりの広がりを感じてもらうための最後の事業を唐突に思いついてしまった。

翌日のカルタ大会で、居合わせた副会長と社会部長に、自分のアイディアを話した。賛同を得た。電話で他の副会長にも、総務部長にも副部長にも話した。賛同を得た。静かに幕を閉じるはずのPTAの3学期が、ここから急激に展開し始める。卒業式は3月17日。1ヶ月後に迫っている。その間に、この唐突な思いつきを現実のものにしなければならぬ。高速で動き始めた。企画の名前を私の独断で「6年生におくる、みんなのことば」と決めた。

簡単な企画書を持って学校を訪ね、唐突に相談する。学校の中で最重要な行事である卒業式を前に、あまりに唐突で大きな提案に戸惑われた。当たり前だった。私の動きは、あまりにも学校に対する配慮を欠いていた。丁寧に丁寧に準備を重ねている卒業式に対して、まるで殴り込みのような提案をしてしまった。しかし、私は、自分の提案が秘めている可能性を信じていた。私がこの唐突な企画に込めた思いは、子どもたちに大人のつながりの広がりを感じてもらいたいということではなかった。思いついたこと挑戦したくなったことに本気で取り組みやり遂げる大人の姿を見せたかつ

たし、この企画を通じて地域の大人のつながりをさらに増すことができると思っていた。校長先生と教頭先生が、思いを受け止めてくださった。実現の道が開けた。動きはさらに高速になった。

すぐに副会長らと一緒に試作品を作って、公民館に駆け込んだ。館長と主事さんに試作品を見せながら、企画の趣旨を話した。賛同を得た。「隣の部屋に、合宿通学の食事を世話してくれた団体の人たちがいるから、メッセージをもらったかどうか」と言われた。しかし、私の手元にはまだ、メッセージを書いてもらうカードのひな型がなかった。手ぶらだった。すぐに公民館にあるカラーの紙をもらい、カード状にカットして、それを手に隣の部屋に飛び込んだ。「6年生に卒業祝いのメッセージを送りたいんです。地域の人たちからたくさんメッセージを集めたいんです。貼りあわせて、これの何倍もの作品にしたいんです」とお願いした。その場でみんなメッセージを書いてくれた。真剣に考えてくれた。名前もわからない地域の子もたちに対して、地域の大人たちが真剣に考えてくれている姿に私は、心底、感動した。この取り組みを絶対に成功させると決意した。

メッセージカードのひな型とメッセージを募る依頼文を作り、学校に届け、保護者に配布する準備を整えてもらった。最後の運営委員会で企画を説明するまでは、保護者への動きを広げることではできない。そのかわり、着々と地域への動きを広げた。進学先の中学校の先生、部活のキャプテン、お医者さん、歯医者さん、お巡りさん、登下校の見守り隊、区長はじめ自治振興会の役員のみなさん、公民館長と主事さん、市議会議員、スポーツ少年団長、民生委員、保育園・幼稚園の先生などなど、あらゆるネットワークをたどって、地域活動をしているみなさんにメッセージを募った。誰もが真剣に、本当に真剣に考えて書いてくれた。大人の気持ちがつながっていくのを感じた。もしかしてこれは、地域の大人のための事業なのではないかと思うくらいだった。

迎えた最後の運営委員会、卒業式の2週間前。1年間をふりかえり、各部門それぞれの貢献への感謝を伝えて、一旦の議事を終えたのち、またも唐突に「締めくくりの事業をやらせてください。大人のつながりの広がり子どもたちに感じてもらいたいんです」と企画を切り出した。地域中からメッセージをすでに集めていること、さらに全保護者に呼びかけたいこと、集めたメッセージは貼りあわせて巨大な掲示物にしたいこと、それを見た子どもたちに大人のつながりの広がりを感じて欲しいこと、を一気に説明した。「これは審議事項ではなく、心からのお願いです」と結んだ。新しいことを次々とやり遂げてきた仲間だったし、地区文化祭に出展した大人の壁新聞をはじめ、共同制作で掲示物を創ってきたのでイメージの共有は早かった。

最後の事業の実現が決まった。最後の運営委員会は、締め挨拶をした副会長の計らいで、全員が輪になって握手、ハイタッチをするという、最高に和やかな雰囲気の中で幕を閉じた。

翌日、企画は全保護者に伝わった。翌週、メッセージ提出の締め切り日。ほとんどの保護者世帯からメッセージが寄せられた。地域のみなさんのものと合わせて700通にのぼった。子どもを思う気持ちは、つながっているんだと、あらためて思った。

3月11日、夜、メッセージを貼りあわせて作品にするために運営委員が集まった。1枚カードを貼るだけでもいいから、一人でも多くの手でつなぎあわせた作品にしたいから、都合のつく時間だけ参加して欲しいとお願いしていた。次々に運営委員が会議室にやってきて、和やかに言葉を交わしながら、少し高揚した表情でメッセージを貼りあわせていった。700通のメッセージは、あつというまにつながり、卒業式場横の廊下に貼り出された。全長15m近くの壮大な作品になった。卒業を祝い、これからの中学生生活を励ます、膨大な声、声、声。ひとつひとつが手書きで、凝った作品から豪快な作品まで多種多様。地域の人たちの温もりがにじみ出るような廊下になった。廊下の温度が上がった気がした。この温度を広く知らせたいと思った。地域の人にも、地域外の人にも。大人の気持ちのつながりが形になったことを広く知らせることで、子どもを思う気持ちの連鎖が波紋のように広がるのではないかと思った。

この取り組みを新聞記者に話した。深く賛同してくれて、すぐに取材され、子どもたちがメッセージに埋め尽くされた壁面に見入っている写真とともに記事が掲載された。卒業式の前日のことだった。

25. 卒業式、「命を燃やせ、今ここで」

翌日の卒業式。PTA会長としての祝辞は、心から願うことを心を込めて、原稿は持たず、卒業生ひとりひとりの目を見て語りかけようと前から決めていた。これまで、どんなスピーチでも、原稿を持つことはなかったが、最重要行事の卒業式となると少々緊張する。子どもたちが何度も練習を積み重ねて当日を迎えるのに、私がいい加減なことをするわけにはいかないから。怯みそうになる私の背中を押してくれる力、支えになる力が必要だった。それが、700人もの人たちから寄せられた「6年生におくる、みんなのことば」であり、それを仲間とともに貼りあわせて壮大な作品に仕上げた経験だった。この支えがあれば、手ぶらで前に立っても、落ち着いて話せると思った。

子どもたちを前に、「卒業式の日だけでなく、毎日が人生に一度きりの特別な日なんです。だから、2度とはやってこない今ここを大切に、命を燃やして生き

てください。あなたの中には成長する力があります。あなたのまわりには応援してくれる人たちがいます。だから、大丈夫。安心して中学校にいてこい。あなたをずっと応援しています」と語った。

語りながら、この語りは、これまで地域の中で私が経験してきたことのすべてのような気がしていた。毎日、毎日、いろんな人に会い、話し、聞き、助けあい、何かを成し遂げ、失敗し、乗り越え、受継ぎ、変えてきた。初めてのことで、どうしていいかわからないことでも、乗り越えられたし、成し遂げられた。いつもそばに、手を差し伸べ、応援してくれる人たちがいた。自分は故郷に15年前に帰ってきて、そうやって地域の人に助けられながら成長してきたという実感があつた。その経験が、卒業生に贈る言葉となって紡ぎ出されていた。PTA会長としての役割は終わりに近づいていだけれど、この経験も大きな時の流れの中の一コマなのだと思う。私はいつも、途上にあるのだと思う。

26. 送別会、「お別れは世界の広がり」

3月末、離任される先生方の送別会を開いた。はじめの挨拶で「お別れは寂しいけれど、お別れは世界の広がりだと思っています。私たちの子どもたちを見守ってくださる先生方が、地域の外にもいてくださるのはとても心強いことです。子どもたちの安全な世界が広がるし、先生方の活躍の舞台が広がります。だから今日は、お別れを惜しむ会ではなく、世界の広がりを喜ぶ会です」と語った。

私はこれまで、絶えず誰かと出会い、関わり、別れ、縁があればまた出会い、ということを繰り返してきた。関わりが途絶えている間に、互いに変化し成長し、刺激的な再会を果たすこともあつた。大学の同級生や前の会社の同僚は、国内外各地に広がっている。あっちにも、こっちにも、遠くにも、近くにも、仲間の輪がつながり広がっている。そんなことを思い浮かべる時、私は、自室にいながらにして、広大な世界を感じ、ゆったりとした心地になれる。広大な世界とつながっている私を感じる。小さい存在だけれど、大いなるものの中にある安心感がある。だから私にとって、別れは世界の広がりだった。送別会のために用意した言葉ではなく、ずっとそう感じてきた。

もしかしたら、このような感覚の中で「つながりの広がりが子どもたちの成長を支える」という思いや、「フワッとつながって、ギュッと話しあって、ドカン！」と実行する」という方針が生まれたのかもしれない。これまでの経験の積み重ねの中で醸成されていた思いが、会長就任というきっかけを得て表に出てきたように思われる。もっとも、このことに限らず、ある瞬間に紡ぎ出される自分の言葉や思いは、自分が想像して

いる以上に長く広い背景、経緯を有しているのだろう。どの瞬間にも、これまでの自分が表出するのだろう。私は今ここにしかいないが、今この私の中には、これまでの私が深く含まれている。

27. 入学式、「ゆっくり、大きくなれ」

新1年生に何を語ろうかと考え始めた時、彼らは生まれてから6年しか経ってなくて、それと同じ時間を小学校6年間で過ごすのだということに、あらためて気づいた。これまで生きてきた時間と同じ長さの時間を小学校で過ごすことの「希望と安心感」を伝えたいと思った。短い時間を生きていると思うと焦ったり、辛かったりするけれど、膨大な時間を生きていると思うと、ゆったり構えることができることを、私自身がこれまで学んできたからだ。

私は、これまで、たくさん失敗したし、たまには成功もしたし、窮地に陥ったこともあつたし、幸運に恵まれたこともあつた。その瞬間、瞬間をとれば、成功と失敗があつたけれど、長い時間で見れば、すべて成長の過程だった。いつの間にか、何とかなっている、できるようになっている。「すぐにできないとダメだ」と思うと辛いけれど、「いつかきっとできるようになる」と信じていけば、続けることができる。だから、結果に一喜一憂しない。そう思うようになっていた。

入学式の日、小さな椅子に、小さな体を行儀よく乗せている子どもたちを前に、目をよく見て、時に頭を撫でながら、語りかけた。「勉強も、運動も、遊びも、たくさんできるようになるぞ。楽しみにしとけや。6年もあるんやからな。あわてんでもいいんやぞ。はじめはできんことだらけでいい。少しずつ、できるようになればいい。あわてんと、ゆっくり、ゆっくり、大きくなれよ」と語りかけた。

卒業式の時と同じく、子どもたちに語りかけながら、その語りは、自分自身にも向けられていることを感じた。PTA会長になって、気が負いがちの時もあつたけれど、できるだけゆったり構えようとしてきた。気が負わず、しかし覚悟を決めて、逃げず、方針を見つめ語り続け、仲間を信じ、期待し、委ね、感謝する。そういう日々の中で、物事は、私の想定をはるかにこえて展開していった。こんな1年間になるなんて、会長就任時には思ってもいなかった。初めは「フワッ、ギュッ、ドカン！」という言葉だけがあつた。それが1年の時を経て、様々な新しく素晴らしい現実を生み出していった。長い時間の中で、言葉は現実になっていった。だから、子どもたちにも、自分自身にも、「あわてんと、ゆっくり、ゆっくり、大きくなれよ」と語ったのだと思う。

28. キセキの1年

平成28年度PTA総会をもって、私はPTA会長を退任し、新会長にバトンを渡した。夏祭りという巨大イベントを成功に導いてくれた副会長が新会長に就任した。役員が何割か入れ替わり、新しい場が生まれたのを感じる。また、新たな、ダイナミックな活動を展開してくれるものと期待している。

退任の挨拶で、「僕には、計画力も実行力もなく、ただ『フワッ、ギュッ、ドカン!』という思いがあるだけでした。あとは素晴らしい仲間にお願ひし感謝するだけでした。そしたら、すごいことが次々と起きて、奇跡のような1年になりました。でも、PTAの力を出し切ったとは思っていません。PTA1000人がつながったら、もっとすごいことができます。1年間、ありがとうございます」と締めくくった。

この時は、純粋に奇跡だと思っていた。いや、安易に思っていたのかもしれない。すごいことが起きたから奇跡だと。しかし、しばらくして、この1年間を少し距離を置いて振り返る機会を得た時、奇跡の違った側面が見えてきた。

市PTA連合会の広報紙に、この年の我が校のPAT活動を紹介する記事を掲載したいという依頼があった。800文字というわずかな文字数で、1年間を総括するという依頼は、私には、とても魅力的に感じられた。奇跡のような1年間に幕を下ろし、この1年間の意味、実体を自分なりにクリアに捉えなおしたいという欲求があったからだ。800文字という制約が、私の目にメリハリの効いた焦点を与えてくれると思った。

1年間に蓄えた資料ファイルや日々の気づきをメモしたノートをつぶさに見返し、小さな出来事や気づきの背後に隠れている根本的な意味を見出そうと試みた。ざっと書き出したら、あっという間に1300文字を超えた。単語レベルの調整ではなく、何を書き、何を書かないかについての大胆な判断が必要になった。何度も読み返し、書き直し、きっちり800文字の原稿が完成した。出来上がってみると、そこに描かれていることのシンプルさに我ながら驚いた。骨子は「つながりを広げるといふ方針を掲げた。地域の力とつながって、つながりが広がって、想定外の展開が生まれた。これは奇跡のように見えたけれど、つながりが広がっていく軌跡だった」というものだった。この1年間はキセキだったけれど、それは、とんでもない出来事としての奇跡ではなく、あたたかくやわらかいつながりが広がっていく足跡としての軌跡だったということに気づいた。

それを目指していたはずなのに、ずっとそれを考えて、会長として語り続けていたはずなのに、渦中にある時には、このシンプルな視界を得ることができていなかった。いや、おそらく気づいていたのだけれど、次々に生まれ展開していく場に対する重圧や焦りや驚

嘆や歓喜にもみくちやにされながら、深く捉えきれていなかった。終わってみて、落ち着いてふりかえって、ようやく、腑に落ちる言葉にすることができた。記事はこう結ばれた。「今なら言えます。『この1年は奇跡じゃなかった。地域のチカラが広がる軌跡だったんだ。だから、キセキはこれからも続くんだ』と」。

結. 展開する場の中で

800文字のシンプルな原稿を書き上げた後、教師教育研究の原稿の構想が大きく変容した。当初、PTA会長としてのリーダーシップやPTAが地域の中で果たし得る役割について考察を進めるつもりだった。考察の対象が変わることはなかったが、それを「場の展開」として捉え直してみようと思った。私もその一部をなすPTAという場、地域という場、場と場の関わり、場の中での私のあり方など、「場の展開」をふりかえれば、「つながりの広がり軌跡」が鮮明になると思った。軌跡を深く捉えられると思った。

資料やノートをあらためて読み返し、800文字という制約を取り払って、私とその一部をなしていた多様な場がどのように展開していったのか、なぜそのように展開していったのかを描写していくことにした。

書き始めてすぐに気づいた。この1年間の軌跡には、長い長い助走期間があったことに。この1年間の軌跡をそこここで支え、多様な場の展開を生み出してくれたのは、私の帰郷以来、様々な分野で紡がれてきたつながりの広がりだった。陸上監督、体協事務局長、幼稚園後援会長、町内会計、主任児童委員、などなど、多様な場を経験しながら、多様なつながりをいただってきた。PTA会長としての1年間を過ごす中で、それ以前のつながりに助けていただいたことがたくさんあった。それ以前の学びによって判断できたことがたくさんあった。

だから、PTA会長としての1年間は語るはずの、この物語は、15年前に遡って、長い軌跡の物語として語り始められる。私に関わってくださったすべての方々への深い感謝を込めて。

(了)